

ていくのがとても大事ですよ。それが可能になってきたら、たぶん「あれがない」「これがない」という状態ではなくなってくると思うし、幸せってというのは、きっとそこにすごく近いんですよ。だからさっきの、相田みつをさんの言葉は、そのことも含めて、「楽しさは自分で生み出すこと」。「幸せはあなたの心が決める」というのは、つまり心自体が「これが楽しい・おいしい・美しい」と思える能力を高めれば全部楽しいから、結果「幸せ」なんですよ。

は、100人規模で市民と行政が集い、第6次総合計画をつくり、その進捗も見守ってきました。映画作りや防災活動を通じ、子どもたちとまちの新たなつながりを生み、育んできました。並行してざくばらんに話し合う場も生まれ、今も続いている集まりもあります。テーマも緩やかで、すぐに脱線してしまったりもするんですけど(笑)。

これからも市民一人ひとりが自分のしあわせを決めていけるよう、一人称で「自分ができること」を考へるきっかけであったり、一歩踏み出すための基礎を作っていくと思います。



平成 26年 11月 12日
高浜二コニコ鬼広場 (高浜港駅前)にて

コラム いまなぜ<幸せ>なのか？ 山崎 亮さんに聞きました

「豊かさ」から「しあわせ」へ

「真の豊かさとは何か？」その問いかけは1970年代くらいから始まったようです。1980年代には書籍も登場し、その集大成が、著者のドイツでの体験から「真の豊かさとは働き方や心のゆとりである」と論じた『豊かさとは何か』（暁峻淑子著1989年）だと思えます。それ以前にも、アメリカのロバート・ケネディが、詩を読んだり絵を描いたりという私たちの豊かさを示すものはGNP（国民総生産）とは違うところで動いているのではないかと語るなど、戦後～高度成長期の反省から、お金やモノをたくさん手に入れることが豊かさではないと先進的な人たちは気づき始めていたのです。しかし、一般の人々にとっての“豊かさ”の基準は「広い家に住めるようになった。」「自家用車がある。」という次元からなかなか脱することはありませんでした。

しかし、ブータン王国のワンチュク国王がGNH（国民総幸福量）を就任時に語り、その考え方をイギリスやアメリカが自国に持ち帰った。日本でもそれを輸入するかのごとく「幸福であるということとは何か？」という問いかけが1990年代後半から始まったのです。

また、「経済学は幸福を定義できない」と長いわれてきたのですが、エラスムス大学(オランダ)が「あなたは幸せですか？」をYes / Noで考えさせるというシンプルな調査を行いました。「Yes」が多い国について経済的な見地から切り込む研究です。日本での同様な調査では、例えば福井県が幸福度が高いというような指標が出ているかと思えます。あるいは、国際的にみて日本はGNPが高いといわれるが、「幸福Yes」がさほど多くなく、フィリピンは同じアジアでGNPは低いが、「Yes」が多い。これはなぜかという疑問が2000年ごろに雑誌で取り上げられ、話題になったことは記憶にあるのではないのでしょうか。

『豊かさとは』では得られなかった気づきが『幸せとは』で得ることができたということかもしれません。